

流れる星は生きている

著書 藤原 てい

この作者は生きて日本へ帰ってくる。その子供たちも立派に成長していく。夫である「新田次郎（作家名）」とも再会できる。その行く末を知っていても先行きが全くみえなかっただろう、あの時代に引き込まれました。

人は苛烈であり残酷だけども、人から力を貰い人に返すことができる。そう気づかされました。

タイトル「流れる星は生きている」は作者が現地で覚えた流行歌からとったものです。
“わたしの胸に生きている あなたの行った北の空 ご覧なさいね 今晩も
泣いて送ったあの空に 流れる星は生きている “

行進が開始された。私は例の通り一番後になった。

「痛い痛い」

と泣く正彦を、蹴とばし、突きとばし、ひっぱたき、私は狂気のように山の上を目ざして登っていった。細い道であった。いよいよ最後の1人となって、

「畜生！ どうせこうなんだ！」

と自分自身を叱り飛ばしていると、前に二人の子供を追いたて追いたて登っていく女が眼についた。崎山さんであった。新溪出発以来今日で六日目、私は初めて知っている人に会ったのである。

「おお崎山さん！」

「あああなたもよく！」

2人は期せずして手を握った。

「もうすぐ三十八度線だわ、二人でしっかり手を握って行きましょう」

私は崎山さんと再会して非常な力を感じた。崎山さんも生き返ったように一郎さんを叱り飛ばした。

「見る！ 正彦ちゃんは黙って歩いているじゃあないか！」

崎山さんも男の言葉を使っていた。

私たちは互いにはげまし、どなりあいながら焼きつける道を登っていった。朝から私の周囲をぶんぶん蠅が飛び廻っている。平壤からついて来た蠅に違いない。咲子は背中でひっきりなしに下痢をしている、それを私はかまってもやれない。きたないものは私の背中を通し、半ズボンの下まで流れ落ちる。蠅はこの臭気を追ってくるのに相違ない。夕立が来れば綺麗に流してくれる。川を渡れば身体まで洗ってくれる。私は蠅なんかどうでもよか

った。

「水！水！」

と子供が血走った眼で訴える。水はもうない。

「あの山を下れば水がある、水を飲みたければ、さあ元気を出して、歩くんだ」

道は、にわかにはわしくなってきた。もう少しもう少しとようやくその頂上につくと、頂上からは平らな道がまだ続いていた。

「崎山さん、三十八度線はまだ？」

「この山を越えればそうだって」

私たちの前に老人が四名ばかりかたまって歩いて行った。互いに助けあいながら、かろうじて杖にすがって行く姿は歩いているというより、むしろ前にのめっていくという姿であった。私たちが追い抜くと、

「生きて行ける人は先へ行って下さい、急いで、急いで逃げなさい。老人は捨てて、早く行っておくれ。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……………」

といていた。私たちは呪詛のような恐ろしいその声を後に聞きながら大きくよけて前に出た。私は初めて人を追い越した。私より力の弱い人たちもいるのだと思うと、変な優越感がちらりと頭をかすめた。道は一本道に真直ぐ続いていて前方に何か白いものが横に長く見えていた。

近づいて見ると、その白いものこそ、一年余りの間私たちの心を離れたことのない、三十八度線の木戸であった。

「あ！三十八度線が見えた！」

二人は立ち止まって顔を見合わせた。胸の動悸がはげしくて物はいえない。眼と眼で真直ぐ行こうといい合って、その白く横に長い線に向ってつき進んだ。

白く横に長い交通遮断棒で道は切断されていた。これが三十八度線の木戸であるかとよく見れば、その傍に駐屯所があって、数名のソ連兵が銃を持って出て来た。私たちははつたとそこに立ち止った。

ソ連兵は早口に何か話しあっていたが、やがて出て来た一人のソ連兵によってがらがらと音を立ててウィンチが巻かれ、遮断棒は静かに頭を持ち上げていった。

〈通れ〉そういう風に顎で合図している。

ああ、この時の感激。

二度と再びないであろう感謝。

何かいいながら私たちはこの棒の下をくぐった。一人の兵隊が子供たちの頭を一人ずつ撫でてくれた。